神戸学院法学第四八巻第三・四号（二〇二〇年三月）

〈紹　介〉

出石重田家旧蔵文書および典籍について

米　田　真理子

出石町は兵庫県の北部に位置する緑豊かな城下町である。出石城趾の石段を上がると、眼下に古い町並みが広がり、町のシンボルである日本最古の時計台・辰鼓楼（しんころう）は、三代目の時計が今も時を刻んでいる。ここにかつて在った出石藩は、「出石郡・養父郡と現在は城崎郡に統合されている気多郡・美含郡を中心に、丹後・美作の一部を領有した外様中藩」（『藩史大事典』）であった。藩主は、小出氏から松平氏、さらに宝永三年（一七〇六）に信濃国上田藩より入封した仙石氏へと代わり、仙石氏が幕末まで支配した。

仙石氏に仕えた藩士に重田氏がいる。信州上田時代からの家臣で、天保十三年（一八四二）成立の出石藩『諸氏略家譜』によると、最初は「塚本」（寛文十三年（一六七三）頃）を名乗り、「柳沢」（正徳五年（一七一五）頃）、「重田」（延享（一七四四～八）以後）へと改姓したことがわかる。[1]

同書には、重田姓で次の二名が掲載されている。

一　御普請奉行席
九石貳人扶持　　重田忠蔵居中

一　安永四乙未年十月廿九日
跡目　后七拾俵五人扶持
一　六拾俵五人扶持　　重田覚治居孝
后甚五兵衛

一　天保九戊戌年十二月十九日　家督

普請奉行は、藩士のうち、侍の「切り米取り（蔵米取り）」に属す身分であり（『出石町史』[2]）、出石藩の執務日誌『御用部屋日記』にも重田の名は見いだせる。その重田家に代々伝えられてきた文書と典籍が、子孫の大谷家に受け継がれて現存する。元神戸学院大学法学部長室秘書の大谷順子さんのご主人英俊さんの母花子さんが所蔵されていたもので、それらは文書四十九点、和本百二十九冊、および木箱とその中に納められた的矢三本などである。

出石藩では、仙石家三代の政辰（まさとき）が安永四年（一七七五）に藩校を創設し、四代の久行（ひさゆき）が天明二年（一七八二）に「弘道館」と名付けた。弘道館を称する藩校は、水戸藩を

はじめ全国に六校あるが、出石藩が最も早い開校である。出石の弘道館は数多くの俊英を輩出しており、なかでも加藤弘之（一八三六～一九一六）は著名で、江戸に出て佐久間象山の門下となり、その後、立憲政体を論じた『隣草』を刊行し、東京大学初代総理、東京帝国大学総長を勤めた。ほかにも、明治期に活躍した出石出身者は多い。気象通報の創始者・桜井勉（一八四三～一九三一）や、明治女学校を開校した木村熊二（一八四五～一九二七）、北海道林業の先覚者・田中壌（一八五八～一九〇三）など、枚挙に暇がない。『兵庫県教育史　藩学郷学私塾寺小屋篇』によると、出石藩には、郷学、私塾、心学舎、寺子屋も設置され、「教育事業は日を逐うて盛観を呈し」、「天保から弘化への黄金時代を現出」[3]したという。こうした豊かな教育環境が人材を輩出する土壌となったのであろう。しかし、明治九年（一八七六）の大火で町の三分の二を焼失し、文書や典籍も多くが失われた。よって重田家旧蔵の文書と典籍は、点数はけっして多くはないが、当時の政治情勢のみならず、出石の学問をも伝える貴重な資料といえるのである。

では、文書のいくつかをとりあげ、見ていこう。知行関係書状が、慶安元年（一六四八）、貞享三年（一六八六）から天保九年（一八三八）にかけて十一点存する。「親類書」三冊（文化十五年（一八一八）・文政四年（一八二一）・嘉永四年（一八五一））や「覚」一通には重田家の親族の名が確認できる。また、慶安五年（一六五二）の奥書を有する『柔捕目録』は、内題に「柔新心流目録」とあるように、江戸時代初期に関口氏心が開いた柔術「新心流」の技を列記する。そして、「拝領御的矢添書」は、文政十三年（一八三〇）九月十九日に「大御書院」で行われた、仙石氏五代久道（一七七四～一八三四）隣席の「的前見分」の折に、七十六歳の「重田甚五兵衛居中」が「的矢」を拝領した出来事を書き留めている（本文後掲）。この文書には草稿や下書きが四通付随し、拝領した的矢を納めた箱の蓋にも同内容の裏書きが確認される。箱の表に「拝領　御的矢　一手」とあり、中には三本の的矢のほかに、扇面が三枚、「政俊公ヨリ拝領幷御自筆　錦　一切」と記した紺紙の包紙と、それに包まれた蠍と花を織りこんだ錦の切れ（5㎝×9㎝）が一枚入っていた。「政俊公」は、信濃国上田藩仙石家二代藩主政俊（一六一七～一六七四）のことか。この日の的前の見分は、『御用部屋日記』の同日条にも記されているが、そこに「甚五兵衛居中」の情報はない。

「甚五兵衛居中」は年齢から逆算すると宝暦五年（一七五五）の誕生となる。『諸氏略家譜』には、忠蔵は家督を継いだのが安永四年（一七七五）で、覚治は天保九年（一八三八）とあるから、忠蔵が該当しよう。なお、覚治の名前の左に付された「后甚五兵衛」は後の改名を示す。『諸氏略家譜』の凡例に「家督後改名アラバ其名ノ脇ニ後何某ト書ベシ」とあり、「親類書」（嘉永四年）にも、弘化元年（一八四四）に改名した由を記している。この「的前見分」での出来事は、忠蔵が「此の上もなき家の面目、後世の宝物」と記したように、重田家にとっては大変な名誉であった。じじつ、その子孫は、明治以降、転居を繰り返すものの、文書と的矢を今日まで大切に伝えてきたのである。さらに、忠蔵が、拝領した的矢を用いて立射を行ったことと文書後半の三句からは、忠蔵がもともと射術に功績があったことがうかがえ、『柔捕目録』の存在もあわせ、重田家が武術に長けた家柄であったことが推察されよう。

つぎに典籍を概観する。江戸後期から明治の版本がほとんどで、一冊だけ手書きの書が含まれている。これらには「小谷」や「今西」などの蔵書印や手沢を示す署名が散見される。そのうち文政元年（一八一八）刊『易学発蒙』五冊に押された「但馬出石／含翠楼／柳町」の印は、井上家の蔵書印[4]で、上から墨でバツ（×）を付して消されている。井上家は重田家の親戚であり、井上家から重田家へ渡った本であったとみなされる。ほかにも「涼風楼主人」の書き付けなどがある。また、多くの表紙に、「重田蔵書之印」の朱印を押した和紙の紙片が貼られている。上段の枠に「明治　年　月　日」、右枠に「　之部」、左枠は「　号」とあり、空欄に記入する形である。かかるなか注目されるのが、明治十五年（一八八二）書写の『日本外史論文』である。手写した今西省三（一八六八～一九一七）は、大谷花子さんの父で、今西家から重田家へ養子に入った人物である。蔵書を受け継ぎ、明治期に整理をしたのはこの人であろう。『日本外史論文』には詳細な書き入れが施されており、省三の学修の跡と目される。また、和歌や俳諧の書物が含まれるのは、弘道館以来の学風によると考えられる（『兵庫県教育史』参照）。明治三十三年（一九〇〇）刊

ラベル

『体用相応之巻』は、著者の未生斎康甫（広甫・一七九一～一八六一）が但馬国気多郡土居村（現在の兵庫県豊岡市日高町）の出身で、華道未生流の二世を継いだ人物であったことから、地元にゆかりある人の著作といえよう。

以上の文書と典籍の在り方には、「文武両道の円満な発達を期し」[5]た出石藩士の修学の様子がうかがえた。江戸後期に三大御家騒動のひとつ仙石騒動が起こり、藩士たちも穏やかならざる日々を送ることになる。重田家は政治の表舞台に名は出ないが、彼の動乱をくぐり抜けた一族であることに違いなく、これらの資料群は、当時の武家の動静を知る手がかりにもなろう。

そこで以下に、「拝領御的矢添書」の本文を紹介し、典籍の目録を掲載する。いずれも、二〇一八年度後期と二〇一九年度後期の「私法特別講義Ａ（古文書読解）」で実施した調査の成果に基づく。二〇一八年度は、典籍一点ずつの調書を取って目録を作成し、和本の補修も行った。受講生は、和田笑葉、北川航平、中島健登、豊田秀矢、松沢遼、森田芹奈、三村竜生、荒巻卓也、奥田拓海、橘晏佳の十名であり、大谷順子さんにもお手伝いいただいた。二〇一九年度は、文書の調査と、典籍目録の確認を行った。受講生は、堀川康平、八元洸揮、高田優真、中山起良、田村薫、松下大輔、土居真大、森川貴大、小林海斗、楢原透の十名である。この際も大谷さんには随時ご参加いただいた。

注

（1）『諸氏略家譜』の引用は、豊岡市立図書館ホームページの「郷土資料関係情報・古文書」に掲載されたＰＤＦによる。

（2）『出石町史』第一巻（通史編上）（出石町、一九八四年、四八五頁）を参照した。

（3）引用は、『兵庫県教育史　藩学郷学私塾寺小屋篇』（兵庫県教育会、一九四三年、三〇〇頁）による。

（4）豊岡市立歴史博物館の石原由美子氏にご教示いただいた。また、石原氏には、本稿脱稿後に文書の整理をお引き受けいただき、様々にご教示を賜った、ここに記して感謝申し上げる。

（5）引用は、『兵庫県教育史　藩学郷学私塾寺小屋篇』（兵庫県教育会、一九四三年、三〇一頁）による。

文書

（包紙）拝領御的矢添書

（本文）

文政十三庚寅の秋菊月十九日的前
御見分之砌、
大殿　久道公　出御被遊
御覧、老年之某被為　御目ニ留
不存奇（寄か）奉蒙
御懇意、其上御的矢拝領之仕、誠ニ生々
世々、冥加至極難有仕合、此上もなき
家之面目、後世之宝物、しかも其砌
右拝領之御矢ニて立之射前ヲ射候様
伺之上蒙
御意、則　御目通ニて一立射候処、仕合ニ
半矢は的の下ふちニ射ル、乙矢は星の
前目ニ当ル、因テ後年之吹聴ニも可成哉と
記し残し置のみ、

重田甚五兵衛
居中（花押）
七十六歳

右本文之趣、まことに稀なる
難有さの餘りニ、拙なき言の葉を
発句脇第三の三句につゝり
左ニしるし置、

老木にも君の恵みや帰り咲
御矢いたゝきて冥加身にしむ
錆鮎も照る明徳に生延て

目録

凡例

一、番号は、出版年順に付した。
一、表題は、外題によるが、外題がない場合は、内題や内容から推定した題を〔　〕に入れて示した。
一、出版年は、記載がない場合は、推定年代を付した。
『日本外史論文』は写本のため成立年を示した。
一、編著者は、記載がない場合は、推定により示した。
一、ラベルの部・号は、原本に貼られた紙片（ラベル）の「部」と「号」の欄に記入された文字を示した。
一、備考には、原本に押印された印と書き付けの署名を中心に記したが、一部割愛した。

番	号	表題	出版年	西暦	編著者	ラベル・部	号	備考
1	1	唐詩選解　上	天明3年	1783	宇野東山	詩文	三	墨印
	2	唐詩選解　中	天明3年	1783	宇野東山	詩文	三	墨印
	3	唐詩選解　下	天明3年	1783	宇野東山	詩文	三	墨印
2	1	易学発蒙　巻之一	文政元年	1818	井上教親			井上印／含翠楼印
	2	易学発蒙　巻之二	文政元年	1818	井上教親			井上印／含翠楼印
	3	易学発蒙　巻之三	文政元年	1818	井上教親			井上印／含翠楼印
	4	易学発蒙　巻之四	文政元年	1818	井上教親			井上印／含翠楼印
	5	易学発蒙　巻之五	文政元年	1818	井上教親			井上印／含翠楼印
3	1	俳諧発句類題狭蓑集　夏之部	弘化3年	1846	仁比多碓嶺撰			朱印／小谷省三印
	2	俳諧発句類題狭蓑集　秋之部	安政6年	1846	仁比多碓嶺撰			朱印／小谷省三印
4	1	類題青藍集　巻上	安政6年	1859	秋元安民撰	国学	一一	井上印／朱印
	2	類題青藍集　巻下	安政6年	1859	秋元安民撰	国学	一一	井上印／朱印
5	1	〔日本政記　神武至廃帝　一〕	文久元年	1861	頼山陽			三宅印／生熊印・今西徹署名
	2	日本政記　皇極至穂徳　二	文久元年	1861	頼山陽			三宅印／生熊印
	3	日本政記　光仁至陽成　三	文久元年	1861	頼山陽			三宅印／生熊印・今西徹署名
	4	日本政記　光孝至後冷泉　四	文久元年	1861	頼山陽			三宅印／生熊印・今西徹署名
	5	日本政記　後三條至土御門　五	文久元年	1861	頼山陽			三宅印／生熊印・今西徹署名
	6	〔日本政記　順徳至後醍醐　六〕	文久元年	1861	頼山陽			生熊印・今西徹署名
	7	日本政記　後村上至後花園　七	文久元年	1861	頼山陽			生熊印・今西徹署名
	8	〔日本政記　後土御門至後陽成　八〕	文久元年	1861	頼山陽	歴史	貳	三宅印／生熊印・今西徹署名
6	1	博物新編訳解　増訂再刻　二上	明治7年	1874	大森惟中訳			大浜小学校印
7	1	増続大広益会玉篇大全　子　首巻	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	

番号	表題	出版年	西暦	編著者	ラベル・部	号	備考
7-2	増続大広益会玉篇大全　丑　一二画	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	
7-3	増続大広益会玉篇大全　寅　三画上	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	
7-4	増続大広益会玉篇大全　卯　三画下	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	
7-5	増続大広益会玉篇大全　辰　四画上	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	
7-6	増続大広益会玉篇大全　巳　四画下	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	
7-7	増続大広益会玉篇大全　午　五画	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	
7-8	〔増続大広益会玉篇大全　未　六画上〕	明治8年	1875	毛利貞斎編			
7-9	増続大広益会玉篇大全　申　六画下	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	
7-10	〔増続大広益会玉篇大全　酉　七画〕	明治8年	1875	毛利貞斎編			
7-11	〔増続大広益会玉篇大全　戌　八九画〕	明治8年	1875	毛利貞斎編			
7-12	増続大広益会玉篇大全　亥　十画	明治8年	1875	毛利貞斎編	字類	壱	
8-1	〔国史略　一〕	明治8年	1875	岩垣松苗	歴史	三	今西印
8-2	国史略　二	明治8年	1875	岩垣松苗	歴史	三	今西印
8-3	国史略　三	明治8年	1875	岩垣松苗	歴史	三	今西氏署名
8-4	国史略　四	明治8年	1875	岩垣松苗	歴史	三	今西氏署名
8-5	国史略　五	明治8年	1875	岩垣松苗	歴史	三	浦上村今西氏署名
9-1	校正標註日本外史　三刻一	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印・今西氏署名
9-2	校正標註日本外史　三刻二	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	今西印・今西氏署名
9-3	校正標註日本外史　三刻三	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	今西印・今西氏署名
9-4	校正標註日本外史　三刻四	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印・今西氏署名
9-5	校正標註日本外史　三刻五	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印／今西印・今西氏署名
9-6	校正標註日本外史　三刻六	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印／今西印・今西氏署名

番号	表題	出版年	西暦	編著者	ラベル・部	号	備考
9-7	校正標註日本外史　三刻七	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印・今西氏署名
9-8	校正標註日本外史　三刻八	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印・今西氏署名
9-9	校正標註日本外史　三刻九	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印・今西氏署名
9-10	校正標註日本外史　三刻十	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印・今西氏署名
9-11	校正標註日本外史　三刻十一	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印・今西氏署名
9-12	校正標註日本外史　三刻十二	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	小谷印・今西氏署名・涼風楼主人署名
9-13	〔校正標註日本外史　地図〕	明治9年	1876	頼山陽	歴史	壱	
10-1	兵要万国地理小誌　一	明治9年	1876	近藤圭造訳述			北極圏を含む世界地図
10-2	兵要万国地理小誌　二上	明治9年	1876	近藤圭造訳述			ヨーロッパ地図・重田氏印／ラベル印
10-3	兵要万国地理小誌　二下	明治9年	1876	近藤圭造訳述			重田氏印／ラベル印
10-4	兵要万国地理小誌　三	明治9年	1876	近藤圭造訳述			アフリカ地図
10-5	兵要万国地理小誌　四上	明治9年	1876	近藤圭造訳述			北アメリカ地図・ラベル印
10-6	兵要万国地理小誌　四下	明治9年	1876	近藤圭造訳述			ラベル印
11-1	点註唐宋八家文読本　一	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評			伊印
11-2	点註唐宋八家文読本　二	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印
11-3	点註唐宋八家文読本　三	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文書	壱	伊印／今西印
11-4	点註唐宋八家文読本　四	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
11-5	点註唐宋八家文読本　五	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西氏・今西氏署名
11-6	点註唐宋八家文読本　六	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
11-7	点註唐宋八家文読本　七	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
11-8	点註唐宋八家文読本　八	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
11-9	点註唐宋八家文読本　九	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名

番号		表題	出版年	西暦	編著者	ラベル・部	号	備考
11	10	点註唐宋八家文読本　十	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
	11	点註唐宋八家文読本　十一	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
	12	点註唐宋八家文読本　十二	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
	13	〔点註唐宋八家文読本　十三〕	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
	14	点註唐宋八家文読本　十四	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	今西氏・今西氏署名
	15	点註唐宋八家文読本　十五	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
	16	点註唐宋八家文読本　十六	明治11年	1878	沈徳潜撰・川上広樹纂評	詩文	壱	伊印／今西印・今西氏署名
12	1	十八史略訓蒙　一巻	明治12年	1879	長瀬寛二編	字類	九	小谷省三印
	2	〔十八史略訓蒙　二巻〕	明治12年	1879	長瀬寛二編	字類	九	小谷省三印
	3	十八史略訓蒙　三巻	明治12年	1879	長瀬寛二編	字類	九	小谷印
	4	十八史略訓蒙　四巻	明治12年	1879	長瀬寛二編	字類	九	小谷省三印／小谷印
13	1	日本外史字引大全　三	明治12年	1879	岩井真二郎編	字類	五	朱印
14	1	唐宋八大家文字引大全　二	明治14年	1881	行徳敬二郎編	字類	一四	
	2	唐宋八大家文字引大全　三	明治14年	1881	行徳敬二郎編	字類	一四	
	3	唐宋八大家文字引大全　四	明治14年	1881	行徳敬二郎編	字類	一四	
15	1	〔古今紀要　一〕	明治14年	1881	川島棋坪編	歴史	七	
	2	古今紀要　二	明治14年	1881	川島棋坪編	歴史	七	
	3	古今紀要　三	明治14年	1881	川島棋坪編	歴史	七	朱印
	4	〔古今紀要　四〕	明治14年	1881	川島棋坪編	歴史	七	
16	1	〔文章軌範字引大全〕	明治14年	1881	桜井茂衛編	字類	一五	朱印／小谷省三印
17	1	続文章軌範字引大全　巻一	明治14年	1881	桜井茂衛編	字類	一五	朱印／小谷省三印
18	1	純正豪求字類大全	明治15年	1882	佐野元恭	字類	一六	朱印・裏に今西氏明治十五年購入の記

番号		表題	出版年	西暦	編著者	ラベル・部	号	備考
19	1	箋註純正蒙求校本　上	明治15年	1882	胡炳文撰・近藤元粋注			朱印
	2	箋註純正蒙求校本　中	明治15年	1882	胡炳文撰・近藤元粋注			今西氏署名
	3	〔箋註純正蒙求校本　下〕	明治15年	1882	胡炳文撰・近藤元粋注	倫理	壱	今西氏署名
20	1	日本外史論文	明治15年	1882	三島中洲			今西省三書写・頭注書き入れ
21	1	〔十八史略　巻一〕	明治16年	1883	岩垣彦明校訂	歴史	四	小谷印
	2	〔十八史略　巻二〕	明治16年	1883	岩垣彦明校訂	歴史	四	
	3	〔十八史略　巻三〕	明治16年	1883	岩垣彦明校訂	歴史	四	小谷印
	4	〔十八史略　巻四〕	明治16年	1883	岩垣彦明校訂	歴史	四	小谷印
	5	十八史略　五	明治16年	1883	岩垣彦明校訂	歴史	四	小谷印
	6	十八史略	明治16年	1883	岩垣彦明校訂	歴史	四	小谷印
22	1	刪修近古史談　巻之一	明治17年	1884	大槻磐渓	歴史	六	小谷省三印／朱印・涼風楼主人署名
	2	刪修近古史談　巻之三	明治17年	1884	大槻磐渓			小谷省三印／朱印・涼風楼主人署名
	3	刪修近古史談　巻之四	明治17年	1884	大槻磐渓			小谷省三印／朱印・涼風楼主人署名
23	1	学校用本代数学　上篇	明治17年	1884	小出寿之太	数学	五	ラベル印／小谷印／重田印
24	1	鼇頭図解十八史略字類大全　一	明治17年	1884	内山経知編	字類	八	小谷印・子静署名
	2	鼇頭図解十八史略字類大全　三	明治17年	1884	内山経知編	字類	八	小谷印・小谷子正署名
	3	鼇頭図解十八史略字類大全　四	明治17年	1884	内山経知編	字類	八	小谷印
25	1	小学字引大全　完	明治17年	1884	平山政瀆編	字類	一七	小谷印・涼風楼主人署名
26	1	小学修身課書字引　二	明治18年	1885	河村与一郎解	字類	二二	朱印／小谷省三印
27	1	〔文法釈義正文章軌範明弁　巻之一〕	明治18年	1885	高垣守正	詩文	貳	
	2	文法釈義正文章軌範明弁　巻之二	明治18年	1885	高垣守正	詩文	貳	
	3	文法釈義正文章軌範明弁　巻之三	明治18年	1885	高垣守正	詩文	貳	小谷印／朱印

番	号	表題	出版年	西暦	編著者	ラベル・部	号	備考
27	4	文法釈義正文章軌範明弁　巻之四	明治18年	1885	高垣守正	詩文	貳	小谷印／朱印
	5	文法釈義正文章軌範明弁　巻之五	明治18年	1885	高垣守正	詩文	貳	小谷印／朱印
	6	文法釈義正文章軌範明弁　巻之七	明治18年	1885	高垣守正	詩文	貳	小谷印／朱印
28	1	〔普通教育　和文初学　巻之上〕	明治24年	1891	羽山尚徳編			
	2	普通教育　和文初学　巻之中	明治24年	1891	羽山尚徳編	国学	九	
	3	普通教育　和文初学　巻之下	明治24年	1891	羽山尚徳編	国学	九	
29	1	新撰日本文学史略　全	明治25年	1892	鈴木弘恭	国学	貳	
30	1	〔版画手本　植物・動物〕	明治28年	1895	石倉五洲			
31	1	日本大文典　第壱編	明治30年	1897	落合直文	国学	三	
	2	日本大文典　第参編	明治30年	1897	落合直文			
	3	日本大文典　第四編	明治30年	1897	落合直文			
32	1	台湾の公学設置に関する意見	明治30年	1897	伊沢修二			
33	1	体用相応之巻　完	明治33年	1900	未生斎康甫			
34	1	報徳之真髄	明治41年	1908	留岡幸助編			
35	1	国民講演　第壹輯	明治44年	1911	佐藤範雄			
36	1	独和辞典	大正14年	1925	三浦吉兵衛・権田保之助			
37	1	華術三才之巻　完	昭和2年	1927	未生斎貴久甫編			今西印・裏表紙に「浦上村」とあり
38	1	神拝詞	昭和4年	1929	武田芳太郎			
39	1	標準生花教本　全	昭和14年	1939	辻井弘洲			

付記　大谷順子さんから最初に相談を受けたのは二〇一七年二月であったが、筆者の力不足のため、調査に時間がかかってしまった。目録を完成し得たのは、受講生の尽力のおかげである。またその間に、早稲田大学の和仁かや先生に近世法制史の観点より出石藩の歴史や資料の扱いについてを、山口大学の尾崎千佳先生に「拝領御的矢添書」の読み方や末尾の句についてご教示いただいた。貴重な資料を調査する機会を与えてくださった大谷さんと、ご指導くださった和仁先生と尾崎先生、そして受講生の皆さんに感謝申し上げる。